



♣ ポンポン・チヨコレートとジャム

坂部 甲次郎

○

今は昔、リヨンの日本人倶楽部で新年宴会が、
いとも盛大に開催されたことがあった。

リオン在住の日本人は全部一堂に会し久しぶりで味う日本料理に舌鼓を打って最後には一人残らず福引の景品まで渡された程の盛況であった。私が昔フランス語を習った先生は『満州の大平原』という福引で棒チヨコを十本とポンポンを沢山頂戴した。

当時リオンに在住していた日本人だったら、この福引を聞くと同時に、ニコツとしたことと思うが時代が変わってしまったので若い方々には解らないかも知れない。日本が満州に出兵して満州では

至る所、砲火がポンポン響き渡っている時だった。それで福引の『ココロ』は『シヨコラ十でポンポン』というのであった。チヨコレートはフランス語でシヨコラという。フランス語で『シヨ』という音の時は英語で『チヨ』である。フランス語で『シャ』の音の時は英語で『カ』の場合が多い。『シャッポー』は英語では『キャップ』である。チヨコレートの場合は英語もフランス語も CHO ではじまるわけは元はメキシコ語で、それがスペインやフランスに輸入されたものである。

スペイン人は一五二〇年頃からメキシコ産のチヨコレートを好んで飲んだが、一般が盛に飲むようになったのは、その製法がわかった一六〇〇年以後のことである。

当時のスペイン人が、どの位、この飲料が好き

だったかは一日に数回も飲んで、それに倦きたらず教会へ行く時でもチョコレイトを持参したものである。

ではメキシコ語で『シヨコ』はどういう意味の語であろうかというところ、これには二説ある。『シヨコ』が音という意味であるという説とチョコレイトの原料である『ココア』のことであるという説である。『シヨコラ』の『ラ』は『水』の意味で水を加えてチョコレイトを作るのであるが水を加えた時に泡立って騒々しい音をたてるから『音』といったのか、それとも『ココア』の実が堅くって粉にするのに騒々しい音を立てなければならぬから『音』といったのか私にはわからない。ココアと水という語源説の方が受取れる説である。



といい片言をいうことを英語で『バップル』という。幼児が片言を喋り出す時に一番簡単に発音しやすい音は唇で発音するBの音である。ボンボンがお菓子でべべが赤坊でポポが痛いところでビビは『私』とか『坊や』のことである。

ボンボンもチョコレイトも女の子と子供の大好きなものだが西洋で子供にやるオヤツは大体ジャムパンときまってる。

ジャムはフランス語で『コンフィチュール』という。コンフィールというフランス語の動詞は果物・野菜・肉などを砂糖・酢・油などにつけるという意味であるが『コンフィチュール』となると砂糖で処理したものだけの意味になる。そして蜜柑類のジャムを英語では特に『マーマレード』というが、この語はギリシャ語で『蜜』と『メロン』との合成された語で昔は林檎をメロンといったのである。だから砂糖の製法を知らなかった昔

今では丹波の山奥に育って一度も都に出たことがないという人でない人だったらボンボンが何物であるかを知っているが、そのボンボンと『ポーンナス』とが語源的には全然同じ代物であることを知っている人は割合にすくない。

ポーンナスはラテン語が、そのまま英語に、フランス語に、日本語になっている語であって、その意味は『良い』というのである。

誰だってポーンナスが悪いなんて思う人はいない。フランス語で『良い』という形容詞は『ボン』であるが、その形容詞を重ねたのが『ボン・ボン』である。世界各国で幼児語といえば重畳にきまっている。犬をワンワン猫をニャニャというようにフランスの赤ん坊が『オイシ・オイシ』という意味で『ボン・ボン』といったのである。それが菓子の名称となったのである。

英語で『赤ん坊』をベビー、フランス語でべ

のギリシャでは蜜でマーマレードを作った。

フランス語で俗に『コンフィチュール』という黄色いネトネトした排泄物を指すばかりでなくフランスでは親しい恋人同志を呼ぶのに『マ・クロット』(私の糞よ)とか『クロタール』(糞たれ)などと呼ぶのは日本人には想像もできない愛称だと思っていいたら捏ねたチョコレイトを俗に『クロット』というのだそう。だから英語で恋しい相手を『マイ・スイート』などと呼ぶのと少しも変らないことがわかった。

(仏語学者)

